

まちなかの居場所の存在が 地域との関係性・生活の質に与える 影響に関する研究

川村 竜之介¹・谷口 綾子²

¹非会員 筑波大学 大学院システム情報工学研究科 (〒305-8573 つくば市天王台1-1-1)

E-mail:s1220489@sk.tsukuba.ac.jp

²正会員 筑波大学講師 大学院システム情報工学研究科 (〒305-8573 つくば市天王台1-1-1)

E-mail:taniguchi@risk.tsukuba.ac.jp

本研究では、都市空間において自宅・職場・学校以外で人々に「居場所」と認知されている場所を「まちなかの居場所」と定義し、その分類と規定因、生活の質や地域との関係性に与える影響について明らかにすることを目的としている。本研究の調査分析では、まず、既存研究を参考にまちなかの居場所感尺度を作成したうえで「まちなかの居場所」の有無や、生活の質、地域との関係性を測る尺度とともにWEBによるアンケート調査を実施し、定量的な分析を行った。その結果、飲食店や友人・親戚宅、図書館などが多くの人に「居場所」として認知されていること、居場所の特徴によってその規定因が異なること、ならびに「まちなかの居場所」として認知されている場所の存在が、その人の生活の質や地域との関係性にポジティブな影響を与えていることが示された。

Key Words : QOL, 居場所, 主観的幸福感, 地域愛着

1. はじめに

本格的な人口減少・超高齢化社会の到来を迎えつつある近年、郊外化の進展や中心市街地の衰退により、住民生活の利便性低下、財政圧迫とそれに伴う公共サービスの質の低下、過度な自動車利用による公共交通の弱体化や環境負荷の増大などといった社会的問題が生じている。これに伴い、国はコンパクトなまちづくりを目標として掲げ、法改正や地方自治体への交付金交付など、様々な支援措置を通じて中心市街地活性化を推進している。国土交通省¹⁾では、中心市街地の衰退によって「人との交流やにぎわい、文化などの機能がなくなり、まちとしての魅力を失ってしまいます。」としており、中心市街地活性化の課題のひとつとして、まちの「生活空間としての魅力の喪失」を挙げている。

そのような中、アメリカの社会学者Ray Oldenburg²⁾は、1989年に「ファースト・プレイス」としての家と、「セカンド・プレイス」としての職場や学校をつなぐ「サード・プレイス」を、コミュニティを形成し都市の魅力を高めるための場として提唱している。「サー

ド・プレイス」は、フランスにおけるカフェやイギリスにおけるパブのように、誰でも気軽に入ることが可能であり、心理的に解放され、更にコミュニケーションが存在するような場を指す。

また日本建築学会³⁾では「都市は時代の進歩とともに便利になり、きれいになってきたと実感はできる。だが、人々が『思い思い』に居られる場所は増えていないのではないか」という問題意識から、近年自然発生的に生まれている「まちの居場所」についての具体的事例を紹介している。「まちの居場所」とは、例えば、子どもの遊び場として、プレーリーダーや来園者などが運営するプレーパークや、地域住民が自由に入り出ることができる高齢者向けグループホーム、商店街の空き店舗を利用したフリースペースなどのことである。明確な定義は無いが、地域の社会的な課題を解決しようと、地域住民や様々な組織が必要に応じて形成していった拠点であるという点では共通している。このような居場所があるかどうかによって、「まちの環境の豊かさは明らかに異なって感じられる」としている。

このような「サード・プレイス」や「まちの居場所」といった場が、地域との関わりを再構築する場と

して機能し、さらには人々の生活の質に影響することで、まちの「生活空間としての魅力」を高めることにつながる可能性がある。

そこで本研究では、「居場所」という概念に着目し、特に自宅や職場などといった日常生活の拠点となるような場所以外の「居場所」について「まちなかの居場所」と定義する。そのうえで、

- ・人々が「まちなかの居場所」だと認知している場所
- ・そこを「まちなかの居場所」だと認知する規定因
- ・「まちなかの居場所」が人々の生活の質や地域との関係性に与える影響

について明らかにすることで、まちなかにおける「居場所」が、まちの「生活空間としての魅力」の向上に寄与するののかについて定量的に検証することを目的とする。

2. 既存研究と研究の方法

(1) 既存研究

石本⁴⁾は、「居場所」とはもともと「いどころ」「座る場所」など、物理的な意味で使用されていたが、1980年代以降、小・中学校における不登校児童の増加が社会問題化したことで、文科省は1992年に不登校に関する報告書を発表し、その中で、学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性を提唱したことがきっかけで、心理的な意味を強調した言葉へと変化していったとしている。そのため居場所について明らかにするためには、心理的側面からの分析が必要となる。

居場所に関する既存研究は大きく、建築分野と心理・教育分野の2種類に分けられる。建築分野における研究は、「サード・プレイス」に関する研究も含まれる。主に、空間デザインに活かすことを目的としており、対象は幼稚園児からオフィスワーカーまで、場所も、特定の施設のみを対象としたものから都市空間全体を対象としたものまで様々である。内容は概ね、空間と人々の行動との関係を明らかにすることを目的としたものであるが、その分析手法も様々である。しかしながら、心理的側面から分析された研究はない。

心理・教育分野においては主に学校問題の解決を目的とし、小学生から大学生までを対象に、家庭や学校を居場所として捉えて研究している。石本⁴⁾は、居場所に関する研究内容は、

- ・居場所の内容や分類に関する研究
- ・居場所に関する臨床事例
- ・心理尺度法を用いた研究

の3つに分けられるとしており、このなかでも特に心理尺度法を用いた研究は、心理的側面からの分析方法を考える上で参考になる。

田中、田嶋⁵⁾は「居場所感尺度」、則定⁶⁾は「心理的居場所感尺度」を、それぞれ作成している。杉本、庄司⁷⁾は「『居場所』の機能を測定する尺度」を作成し、「自分ひとりの居場所」、「家族のいる居場所」、「家族以外の人々のいる居場所」それぞれの居場所の固有性について明らかにしている。

石本、齋藤⁸⁾と石本⁹⁾は、「居場所感尺度」を作成し、個人属性や行動による居場所感の違いを明らかにしている。中村¹⁰⁾は、杉本、庄司⁷⁾を参考に「大学生版『居場所』の心理的機能尺度」を作成し、居場所感因子がアイデンティティ確立に与える影響などを明らかにしている。

このように、居場所感尺度を用いた研究は心理・教育分野において蓄積されている。そこで本研究においても、これらの既存研究と同様にアンケート調査を実施し、居場所感尺度を用いることで、「まちなかの居場所」について心理的側面からの分析を試みる。

(2) 研究の方法

まず、「人々が『まちなかの居場所』だと認知している場所」については、アンケート調査の自由記述による結果について、居場所を2通りの分類方法で集計することで明らかにする。

「そこを「まちなかの居場所」だと認知する規定因」については、「まちなかの居場所感尺度」を作成することで明らかにする。「まちなかの居場所感尺度案（質問項目）」を既存研究や予備調査結果を参考に作成し、調査結果から因子を抽出する。「まちなかの居場所感尺度」各因子が居場所の選択（どのような種類の居場所を選択したか）に与える影響を共分散構造分析によって明らかにする。

「『まちなかの居場所』が人々の生活の質や地域との関係性に与える影響」については、まず「まちなかの居場所」の有無で人々の生活の質や地域との関係性を測る指標を比較することで明らかにする。また、居場所の選択が、人々の生活の質や地域との関係性に対して与える影響を、共分散構造分析によって明らかにする。

表-1 予備調査内容

調査形式	対象者	質問内容
ブレインストーミング	研究室の教員と学生(5名)	家、学校、職場以外で「居場所」だと思ふ場所について、 ①場所「それはどこ(どんなところ)か」
インタビュー調査	研究室の学生の親戚や友人(11名)	②理由「なぜ、そこが居場所だと思ふのか」

表-2 予備調査結果

①場所	自宅・部屋、友人宅、車、公園、研究室、実家、地元の駅・まち、空港や鉄道での決まった席、飲食店(レストラン、カフェ、バー、マック、ドトール、豚カツ屋、松屋、)図書館、カラオケ、きれいな星が見えるところ、犬の散歩コース、多摩川、通勤途中のコンビニ、旧友との飲み会、サークル、趣味の集まり、友人との電話、twitter
②理由	くつろげる、落ち着く、居心地がよい、楽しい、うれしい、安心する、ほっとする、おいしい、気がまぎれる、リラックスできる、疲れが取れる、仲間に会える、仲が良い、つながりを感じる、受け入れてもらえる、包み込まれるような感じ、話や相談ができる、店員さんと話せる、よく知っている、行きつけである、いつも行っていた、ずっと関わっていた、幼いころからよく遊んでいた、そこが好き、「よくいくまち」という感じ、何時間いてもいい、いついてもいい、何もすることがなくても居たい、「帰ってきた」という感じ、「自分だけの場所」という感じ、所属している、立ち位置がはっきりしている、誰にも会う必要がない、好きなことができる、解放される雰囲気、やるべきことができる、ほかのことを考えずに済む、頭の中を整理できる、周りが静か、読書しやすい、邪魔されない、眠れる、目標がある、接客がいい、素の自分になれる、快適な環境、新しい発見がある、地元で食材を使っている、自然に囲まれている、タバコが吸える

(2) 調査設計

作成した居場所感尺度案に加え、表-4のような計測指標を設定する。

a) まちなかの居場所の有無

まず、被験者が「まちなかの居場所」と認知している場所の有無を調べるための質問を設定した。また比較のため、自宅や職場、学校のいずれかにおいて「居場所」と認知している場所の有無を調べるための質問も設定した。

b) まちなかの居場所について

「まちなかの居場所」だと認知している「場所」とその「理由」、そこへ行く際の標準的な「人数」についての質問を設定した。「場所」については自由記述形式、「理由」については予備調査から得られた回答から代表的なものを選択肢として設定した。「人数」については「1人」、「2人」、「3人以上」を選択肢として設定した。

c) 居場所感尺度

第3章(1)で作成した「まちなかの居場所感尺度案」78項目について、b)で回答した居場所について思うことを「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの5段階で尋ねる質問を設定した。

d) 生活の質や地域との関係性を測る指標

生活の質を測る指標として、まず内閣府の国民生活選好度調査で実施されている「生活全般についての満足度」を参考に、「生活満足度(単一項目)」を設定した。また生活満足度の測定尺度として多用されるDiener¹⁴⁾らによる「the Satisfaction With Life Scale」を日本語に翻訳した、角野¹⁵⁾による「人生に対する満足尺度(SWLS)」から3項目を設定した。

次に、地域との関係性を測る指標として、大谷、芳賀¹⁶⁾が作成した地域愛着に関する尺度を参考に萩原、藤井¹⁷⁾が構成した「地域愛着尺度」のうち、構成要

3. 調査について

(1) まちなかの居場所感尺度案の作成

まちなかの居場所感尺度を作成するために、まず居場所感を測る質問項目を作成する。本研究では予備調査と、居場所に関する既存研究から質問項目を抽出した。

a) 予備調査

予備調査は、研究室のメンバーの方々を対象としたブレインストーミングと、メンバーの家族や親せき、友人の方々に対して、メールやfacebookなどでインタビュー調査を依頼することで実施した。調査内容を表-1に、調査結果を表-2示す。調査結果から、飲食店が多い以外は、人により様々な場所が居場所として認知されていることや、場所の持つ機能や用途によって、居場所だと認知する理由は大きく異なることが分かる。

b) 質問項目の抽出

居場所に関する既存文献と予備調査結果から質問項目を抽出した。その際、

- ・意味が同じ、または類似している質問項目のなかから、ひとつを残して削除
- ・まちなかの居場所においては、考えられない場面を想定している質問項目を削除(教育現場など、特定の場面に限定している質問項目)
- ・まちなかの居場所感に影響しているとは考えにくい質問項目を削除

という手順で質問項目の絞り込みを行った。表現の仕方を統一するなどして、最終的に78の質問項目を作成した。質問項目と質問項目を抽出した文献を表-3に示す。

表-3 居場所感尺度案

質問項目	参考文献	質問項目	参考文献
とてもよい雰囲気だ	林田 ⁹⁾	ここにいていいと感じる	則定 ⁶⁾
自分のことをあたたかく受け入れてくれる人がいる	田中, 田島 ⁵⁾	一緒にいると安心できる人がいる	日本建築学会 ³⁾
くつろげる		自分が役に立っていると感じる	
のんびりできる		自分に役割がある	
落ち着く		ありのままの自分が出せる	
気持ちが楽である		自分のやりたいことをすることができる	
居心地がいい		いろいろな人がいる	
仲間だと感じる人がいる		いろいろな人に接することができる	
自分や自分たちだけの場所であると感じる		理由もなくいられる	
ひとりになれる		フラッと気軽に入れる	
気がまぎれる		誰でも簡単に入れる	
まわりを気にしなくて良い		活発に活動できる	
自分の決まった場所(席など)がある		いろいろな活動がある	
静かな感じがする		近い	
明るい感じがする		アクセスがいい	
にぎやかな感じがする		地域とのかかわりがある	
開放的な感じがする		地域の情報が集まる	
なごやかな感じがする		地域とのつながりを感じる	
あたたかい感じがする		自分の話を聞いてくれる人がいる	
そこにいると不安が取り除かれる		プライベートな話ができる	
自分を必要としてくれる	雑談できる	ブレーンストーミング	
一人じゃないと感じる事ができる	そこが好きだと感じる		
何でも本音で話しあえる	「よくいくところ」という感じがする		
唯一の居場所であると感じる	いついてもいい		
人と関わらなくてもよい	解放される感じがする		
自分の思い通りに過ごせる	そのメンバーの気心が知れている		
一人でいても全く気にならない	そのことをよく知っている		
気を遣うことがない	「帰ってきた」という感じがする		
好きな物がある	新しい発見・出会いがある		
安心する	なじみがある		
楽しいと感じる	感動する・感動したことがある	予備調査	
おもしろいと感じる	頭の中を整理できる		
素直になれる	頭の切り替えができる		
無理をしないでいられる	思い出がある		
自分の能力を発揮できる	思い入れがある	独自に追加	
悩みを聞いてくれる人がいる	ここでなければならないと感じがする		
誰にも邪魔されない	そこにしかないものがある		
自分だけの時間が持てる	表-5 生活の質と地域との関係性を測る計測指標		
自由だと感じる	指標	質問項目	
自分はそのメンバーである	生活満足度	「現在の生活に満足している」と思う	
物思いにふけることができる	人生満足度	「ほとんどの面で、私の人生は理想に近い」と思う	
		「私は自分の人生に満足している」と思う	
		もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何も変えないだろうと思う	
	地域愛着	自分の住んでいる地域は住みやすいと思う	
		自分の住んでいる地域は大切だと思う	
		自分の住んでいる地域の雰囲気や土地柄が気に入っている	
	地域接触度	自分の住んでいる地域にはいつまでも変わってほしくないものがある	
		地域の人々と挨拶をする機会が多い	
	地域疎外感	地域の人々と話をする機会が多い	
		自分と自分の住んでいる地域とは一心同体だという感じがする*	
		地域社会は地域の中の一人ひとりの人間関係の集合にしかすぎないと思う	
		自分は自分の住んでいる地域というものをとても身近なものとして感じる*	
		自分が住んでいる地域に自らをなじませるのは当たり前だと思う*	
		もし、自分ひとりの利益と地域全体の利益が対立したらどちらを優先しますか*	

表-4 計測指標

尺度	内容
まちなかの居場所の有無	
まちなかの居場所について	どんなところか
	どんなときに行くか 何人で行くか
居場所感尺度案	居場所についての78の質問項目
生活の質や地域との関係を測る尺度	生活満足度
	人生満足度
	地域愛着
	地域接触度 地域疎外感

素である「選好」から2項目、「感情」から1項目、「持続願望」から1項目を選択して、質問項目に設定した。また萩原, 藤井¹⁷⁾が作成した「風土接触度」のうち、「地域の人々との交流」に関する2項目、また逆転項目として羽鳥, 中野, 藤井¹⁸⁾による「地域に対する疎外意識を量る心理尺度」を設定した。

本研究ではこれらの指標について、「人生に対する満足尺度 (SWLS)」を「人生満足度」, 「地域愛着

*:逆転項目

尺度」を「地域愛着」，「地域の人々との交流」に関する「風土接触度」を「地域接触度」，「地域に対する疎外意識を量る心理尺度」を「地域疎外感」と，それぞれの略称を使用する。各尺度の質問項目を表-5に示す。

これらの計測指標を用い，アンケート調査を実施する。

(3) 実施調査の概要

実施調査の概要を表-6に示す。アンケート調査は，インターネットによる調査を調査会社に依頼して行った。

被験者が認知する「まちなかの居場所」の種類は，地域によって差があると考えられるため，最もまちなかに存在する居場所の種類が豊富であると考えられる東京都（23区）を対象地域に設定した。また，性別や年齢については偏りが発生しないよう均等に割り付けた。

(4) アンケート調査の基礎集計

アンケート調査によって得られた1500サンプルのうち，質問事項に適切に答えていない可能性が高いと考えられるサンプル（各質問のすべての項目で全く同じ回答をしているもの）については除き，1478サンプルを集計・分析の対象とした。

表-6 実施調査の概要

調査方法	インターネットによる配布・回収
調査対象エリア	東京都23区
調査実施日	2011年12月26日～12月28日
対象属性	性別、年代(20～60代)均等割り付け
サンプル数	1500サンプル

表-7 居場所の有無についてのクロス集計

		自宅や職場・学校以外での居場所の有無		合計
		あり	なし	
自宅や職場・学校での居場所の有無	あり	714	667	1381
	なし	16	81	97
合計		730	748	1478

自宅や職場，学校に居場所がありますか？

自宅や職場，学校以外に居場所がありますか？

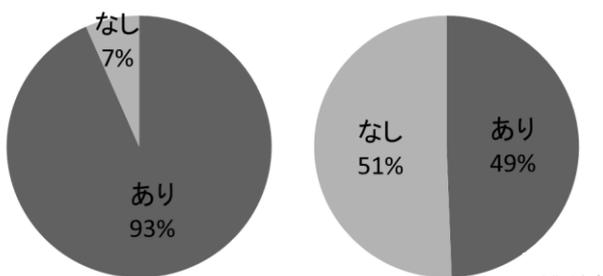


図-1 居場所の有無

まず，居場所の有無に関する回答結果を図-1に示す。「自宅や職場，学校に居場所がありますか？」という質問に対して，ほとんどの方が有ると答えたが，「自宅や職場，学校以外に居場所がありますか？」という質問に対してはほぼ半分ずつに分かれる結果となった。

次に自宅や職場，学校における居場所の有無と，自宅や職場，学校以外での居場所の有無についてのクロス集計表を表-7示す。

どこにも居場所がない人や，自宅や職場，学校に居場所がないためにやむを得なく自宅や職場，学校以外に居場所を見出している人が，少数ではあるが存在することがわかる。

4. 「まちなかの居場所」の実態と影響

(1) 人々が「まちなかの居場所」と認知している場所

人々が「まちなかの居場所」と認知している場所について明らかにするため，2種類の分類方法で居場所を分類し，集計した。

a) 分類A（用途や機能の違いで分類）

自宅や職場，学校以外での居場所について，「それはどこ（どんなところ）ですか？」という質問（自由記述方式）に対する結果をもとに，用途や機能の違いで分類した。図-2に集計結果を示す。

極端に数が少ない回答は「その他」，不適切な回

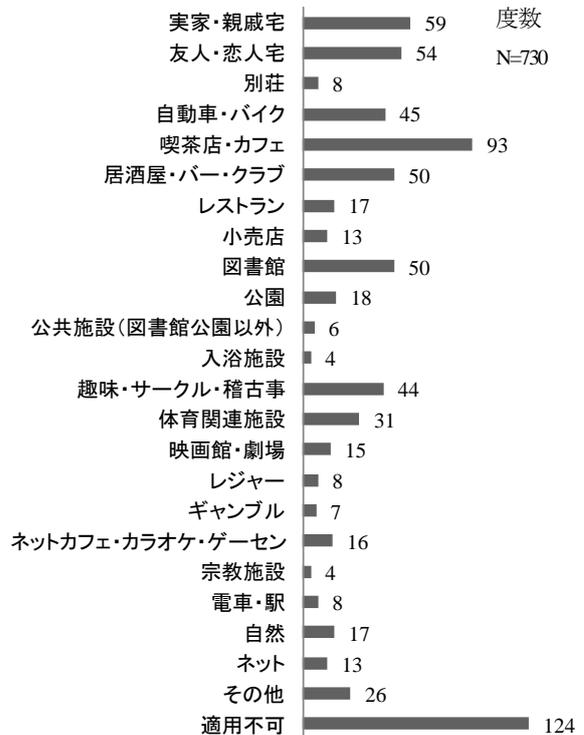


図-2 分類Aでの集計結果

答については「適用外」に分類している。

最も多くの人に居場所だと認知されている場所は「喫茶店・カフェ」であり、次いで「実家・親戚宅」, 「友人・恋人宅」といった他者の家, 「居酒屋・バー・レストラン」「図書館」, 「自動車・バイク」, 「趣味・サークル・稽古事」という順になる。概ね, サードプレイスと言われる場所と, 他人の家が多いことが分かる。

b) 分類B (プライベートorパブリックと交流の有無で分類)

中島¹⁹⁾は, 藤竹²⁰⁾と住田²¹⁾による居場所の分類を一つにまとめ, 居場所を「空間の支配度」軸によって「テリトリー」か「非テリトリー」か, 「他者との関わり」軸によって「交流」か「隔離」かに分け, 「テリトリー×個人的居場所」, 「非テリトリー×個人的居場所」, 「テリトリー×社会的居場所」, 「非テリトリー×社会的居場所」の4つに分類した。この分類方法を参考に, 本研究の分類Bでは「プライベートorパブリック軸」と「交流の有無」軸によって「パブリック×交流無し」, 「パブリック×交流有り」, 「プライベート×交流無し」, 「プライベート×交流有り」の4つに分類した。

パブリックかプライベートかの判断は, 表-8 に示すように分類 Aを用いて行った。この際, 分類 Aの「自然」, 「ネット」, 「その他」については判断

表-8 パブリックかプライベートかについての分類方法

プライベートorパブリック	居場所の種類(A.小分類)
プライベート	1 実家・親戚宅
	2 友人・恋人宅
	3 別荘
	4 自動車・バイク
パブリック	5 喫茶店・カフェ
	6 居酒屋・バー・クラブ
	7 レストラン
	8 小売店
	9 図書館
	10 公園
	11 公共施設(図書館・公園以外)
	12 入浴施設
	13 趣味・サークル・稽古事
	14 体育関連施設
	15 映画館・劇場
	16 レジャー
	17 ギャンブル
	18 ネットカフェ・カラオケ・ゲーセン
	19 宗教施設
	20 電車・駅
適用外	21 自然
	22 ネット
	23 その他
適用外(一部例外有り)	24 適用外

が難しいため「適用外」とした。ただし分類 Aの「適用外」については, 分類 Aで二つ以上の居場所を答えていたために「適用外」とした回答のうち, パブリックかプライベートなのかの判断が可能(二つ以上の回答がすべてパブリックか, もしくはプライベートだと判断できる場合)であり, かつ分類 Aの「自然」「ネット」「その他」のいずれにも該当しない場合のみ, パブリックかプライベートのいずれかに含めている。

交流の有無の判断は, 表-9 に示すように, 居場所における「人数」についての質問と, 「理由」についての設問の選択欄「人に会いたい・話をしたいとき」という項目に対する回答から判断した。「人数」についての質問に対して「1人」と答えており, かつ「人に会いたい・話をしたいとき」という項目を選択していない場合にのみ「交流無し」とし, それ以外を全て「交流有り」と判断した。

分類Bでの集計結果を図-3に示す。プライベートな場所よりも, パブリックな場所の方が多くの人に居場所として認知されており, 更にパブリックな場所においては, 交流がない場所の方が多くの人に居場所として認知されていることがわかる。

(2) 「まちなかの居場所」だと認知する規定因

a) 因子の抽出

「まちなかの居場所」だと認知する規定因について明らかにするため, まちなかの居場所感尺度案である78の質問項目の回答について, 因子分析(主因子法・promax回転)を施した。固有値が1以上の基準を設けた結果, 12の因子が抽出された。因子負荷量0.4未満の質問項目を削除して分析を繰り返した結果, 最終的に68の質問項目を採用した。因子構造と各因子負荷量, 因子間相関, 各因子の信頼性係数を表-10

表-9 交流の有無についての分類方法

「人に会いたい・話をしたい」という質問項目への選択の有無	人数	
	1人	2人以上
選択	交流有り	交流有り
非選択	交流無し	交流有り

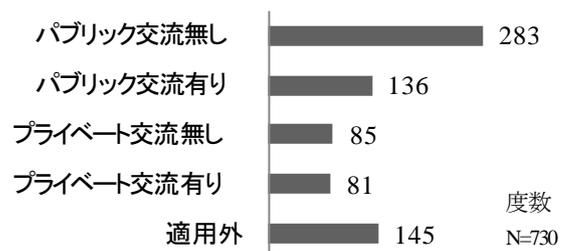


図-3 分類Bでの集計結果

表-10 まちなかの居場所感尺度の因子分析結果

因子名 (○内は信頼性係数)	因子負荷量												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
第1因子: 被受容感 (α=.982)	.99	.00	.02	-.06	-.03	.00	-.05	.01	.00	.03	.02	-.04	
フレイトな話が出る													
悩みを聞いてくれる人がいる	.98	.03	.00	-.13	-.04	.03	.01	.01	.03	-.01	-.01	-.01	
自分の話を聞いてくれる人がいる	.98	-.02	.01	-.12	-.01	-.01	.00	.02	.02	-.01	.00	.01	
何でも本音で話あえる	.97	.08	-.02	-.03	-.04	.01	-.02	.06	-.02	-.01	.01	-.03	
雑談できる	.94	-.02	.02	-.03	-.04	.01	-.10	.16	-.05	.02	-.01	.02	
一緒にいると安心できる人がいる	.76	-.07	-.03	.00	.06	-.06	.10	.00	.00	.02	-.05	.12	
自分のことをあたくよく受け入れてくれる	.71	-.08	.01	.05	.07	.03	.10	.00	.00	-.01	-.03	.12	
仲間だと感じる人がいる	.71	-.03	.00	.09	.00	-.04	.07	.15	-.01	-.02	-.11	.08	
一人じゃないと感じる事ができる	.64	-.05	.03	.10	.13	.03	.01	.23	.09	-.04	-.01	.12	
そのメンバーの気心が知れている	.58	-.10	.01	.11	.13	.06	.05	.00	-.05	-.02	.07	.00	
自分や自分たちだけの場所であると感じる	.49	.15	-.02	.33	-.08	-.04	.16	-.15	.07	-.01	.00	-.09	
唯一の居場所であると感じる	.45	.23	.02	.21	-.10	.13	.13	.13	.15	.01	-.06	.04	
第2因子: 自由感 (α=.916)	.15	.85	.04	-.01	.09	-.01	-.10	-.02	-.11	.02	-.07	.03	
自分の思い通りに過ごせる													
自分だけの時間が持てる	-.05	.83	-.01	-.02	-.08	-.01	-.05	.15	.10	.00	.00	.02	
自分のやりたいことをすることが出来る	.08	.80	-.04	.14	-.03	-.01	.00	-.10	.06	-.15	-.03	.03	
誰にも邪魔されない	.01	.79	-.03	.04	-.11	.03	-.02	-.16	.02	.03	-.02	.03	
人と関わらなくてもよい	-.13	.72	-.12	.00	-.08	.00	.03	-.14	.07	-.03	.10	.04	
ひとりになれる	-.14	.63	.05	-.10	-.29	.11	.01	.09	.24	-.03	.11	-.08	
自由だと感じる	.01	.63	.09	.06	.17	-.04	-.10	.09	.03	-.01	.01	.06	
まわりを気にしなくて良い	.18	.49	.10	-.05	.11	-.06	-.02	-.16	-.02	.01	.22	.07	
一人でいても全く寂しくない	-.25	.45	.06	.07	-.17	.06	.05	.16	.15	-.01	.25	.06	
気を遣うことがない	.00	.44	.09	-.12	.20	-.03	.01	-.09	-.03	-.02	.29	.17	
第3因子: リラックス感 (α=.92)	-.05	-.01	.97	.01	-.18	.01	.01	-.04	.05	.06	.00	-.05	
落ち着く													
安心する	.00	-.10	.91	-.01	-.10	.01	.01	.00	.11	.01	-.06	.02	
くつろげる	.07	-.02	.84	-.12	.04	.00	-.06	-.06	-.03	.03	.13	-.09	
気持ちが楽である	-.04	-.02	.82	-.04	-.01	.03	-.01	.04	.01	-.05	.01	.08	
居心地が良い	-.07	.05	.82	.03	.06	-.04	-.02	.08	-.08	.02	-.07	.05	
のんびりできる	.15	.07	.80	-.10	.02	.01	-.17	-.13	.02	-.01	.12	-.15	
ここにいいたいと感じる	-.09	.03	.55	.09	.07	.00	.13	.09	-.07	-.03	-.01	.12	
楽しいと感じる	-.06	-.04	.49	.17	.25	-.06	-.04	.16	-.18	-.02	-.08	.06	
そこにいると不安が取り除かれる	.08	.10	.47	.05	-.02	.11	.18	-.04	-.01	-.05	-.22	.16	
第4因子: 愛着感 (α=.918)	.08	-.13	.04	.91	-.03	-.01	-.01	-.06	.10	.02	.02	-.11	
思い入れがある													
そこにしかないものがある	-.03	.06	-.07	.88	-.11	.00	-.01	.01	-.09	.00	.00	.15	
感動する感動したことがある	-.01	.01	-.04	.85	.03	.07	.02	-.03	-.06	-.06	-.07	-.06	
ここでなければならぬという感じがする	.25	.06	-.02	.82	-.11	.05	-.01	.11	.01	-.01	-.03	-.15	
思い出がある	.15	-.15	.10	.75	.00	.00	-.01	.07	.08	.00	.11	-.19	
好きな物がある	-.08	.07	-.09	.68	.10	.04	-.15	.11	.09	.05	.07	.18	
そこが好きと感じる	-.09	.09	.05	.60	.11	-.07	.06	.09	-.06	-.01	.06	.19	
なじみがある	.17	-.09	.10	.45	-.19	-.04	-.02	.15	.04	.13	.20	.14	
第5因子: 活気 (α=.901)	-.07	.10	-.05	-.09	.88	-.02	-.02	.05	.10	-.01	.03	-.07	
開放的な感じがする													
にぎやかな感じがする	.08	-.09	-.06	-.10	.76	.05	-.07	.22	-.09	.00	.12	-.24	
明るい感じがする	-.09	-.08	.00	-.06	.74	.09	.01	-.05	.02	.05	.05	.12	
なごやかな感じがする	.15	-.07	.03	.02	.72	.06	.14	-.18	.13	.01	.01	.14	
いろいろな活動がある	.01	.07	.01	.07	.72	-.01	.26	.03	.04	-.02	.01	-.50	
あたたかい感じがする	.16	-.13	.04	.03	.70	.05	-.10	-.17	.09	-.01	.08	.17	
活発に活動できる	.03	.13	.01	.01	.70	.06	.30	.05	-.03	.04	-.06	-.39	
新しい発見出合いがある	-.15	-.04	-.02	.15	.48	.10	.15	.24	.15	-.09	-.01	-.16	
とてもよい雰囲気だ	-.05	-.07	.15	.26	.47	-.01	-.11	-.11	.10	-.02	.05	.22	
第6因子: 地域との紐帯 (α=.935)	-.04	.00	-.01	.00	.09	.92	.01	.03	-.05	-.05	.02	.05	
地域とのつながりを感じる													
地域の情報が集まる	.02	.00	.02	-.02	.06	.88	-.01	.05	-.03	-.01	.01	.04	
地域とのかかわりがある	.04	.01	-.01	.06	.03	.87	-.06	-.01	-.05	.11	-.07	.05	
第7因子: 自己有用感 (α=.934)	.17	-.11	.00	-.02	-.04	-.04	.83	.00	-.02	.03	.10	.09	
自分に役目があると感じる													
自分が役に立っているときがあると感じる	.24	-.15	.00	-.08	-.03	.01	.81	-.02	-.02	.02	.15	.10	
自分を必要としてくれる	.22	-.15	.02	-.05	.02	-.02	.75	-.08	-.03	.02	.11	.15	
自分の能力を發揮できる	.12	.14	-.02	.01	.01	-.01	.65	.02	-.04	.07	-.09	.12	
第8因子: 多様性 (α=.861)	.06	-.02	.00	-.06	.02	.03	-.04	.81	.06	.02	.14	.06	
いろいろな人がいる													
いろいろな人に出会えることができる	.28	-.01	-.03	.02	.08	-.03	-.02	.74	.04	-.02	.06	-.09	
第9因子: 思考できる環境 (α=.880)	.07	.16	.00	-.07	.07	-.05	-.03	.05	.85	.02	-.12	.08	
頭の中を整理できる													
物思いにふけることがある	-.01	.23	-.02	-.04	.10	-.03	-.03	.04	.71	-.05	.02	.03	
頭の良い人がいる	-.02	.09	.04	.06	.19	-.04	-.04	.07	.64	.10	-.14	.12	
第10因子: アクセスの良さ (α=.878)	-.02	.03	.00	-.06	-.02	.06	.10	.00	.05	.87	-.01	-.01	
近い													
アクセスが良い	-.02	.02	.00	.07	.04	-.01	.03	.01	.00	.85	.02	-.07	
第11因子: 入りやすい環境 (α=.831)	-.04	.13	.02	-.03	.15	-.04	.06	.14	-.07	.05	.64	-.01	
フラットな環境に入れる													
理由もなくいられる	.01	.26	.05	.06	.10	-.03	.09	.09	-.16	-.01	.63	-.02	
第12因子: 自己本来感 (α=.896)	.13	.11	.09	-.03	-.08	.06	.18	.03	.10	-.01	.06	.38	
無理をしないでいられる													
無罪になれる	.15	.07	.00	.08	.00	.03	.35	-.03	.09	-.05	-.05	.51	
ありのままの自分を出せる	.15	.12	-.01	.04	-.04	.02	.41	-.01	.00	-.04	-.03	.51	
因子番号と率	.16	.11	.11	.10	.10	.10	.04	.07	.04	.04	.03	.05	.04
累積寄与率	.16	.28	.38	.48	.58	.63	.69	.73	.77	.80	.84	.88	
因子間相関	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
第1因子: 被受容感		.02	.44	.61	.57	.25	.59	.26	.01	.00	.14	.39	
第2因子: 自由感			.43	.38	.37	.16	.15	.07	.50	.28	.41	.27	
第3因子: リラックス感				.56	.55	.06	.28	.13	.25	.22	.42	.64	
第4因子: 愛着感					.72	.25	.59	.38	.24	.10	.26	.50	
第5因子: 活気						.34	.48	.46	.21	.24	.16	.55	
第6因子: 地域との紐帯							.35	.25	.31	.25	.09	.08	
第7因子: 自己有用感								.27	.10	-.04	-.01	.16	
第8因子: 多様性									-.04	.16	-.20	.11	
第9因子: 思考できる環境										.19	.40	.10	
第10因子: アクセスの良さ											.28	.21	
第11因子: 入りやすい環境												.34	
第12因子: 自己本来感													

に示す。第1因子は、自分の話を聞いてもらえる他者の存在や、自分が仲間やメンバーであることを指す項目であるため「被受容感」と命名した。第2因子は、自分一人で自由に行動できることや、他者との接触を避けられることを肯定的に捉えている項目であるため「自由感」と命名した。第3因子は、その人がリラックスしている状態を表す項目であるため「リラックス感」と命名した。第4因子は、その場所に対する思い入れや好感を表す項目であるため「愛着感」と命名した。第5因子は、その場所が明るく開かれた雰囲気であり、またその場所で様々な活動があるこ

とを示す項目であるため「活気」と命名した。第6因子は、その場所と地域との関係性を表す項目であるため「地域との紐帯」と命名した。第7因子は、自分に役割があり、他者から必要とされていることを示す項目であるため「自己有用感」と命名した。第8因子は、その場所での多様な他者の存在を示す項目であるため「多様性」と命名した。第9因子は、その場所が思考できる環境にあることを示す項目であるため「思考できる環境」と命名した。第10因子は、その場所がアクセスという点において便利であることを示す項目であるため「アクセスの良さ」と命名し

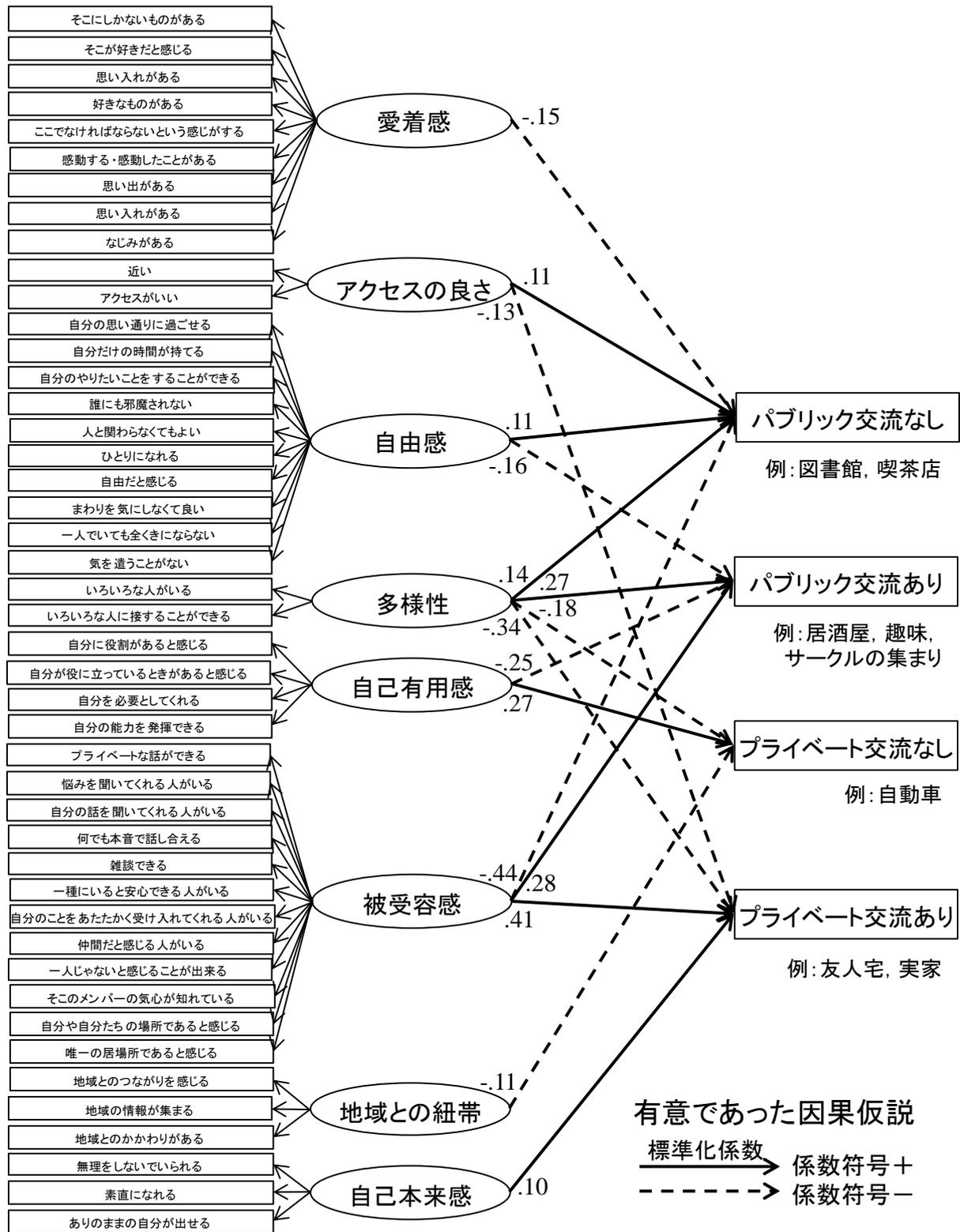


図-4 居場所であると認知する規定因についての共分散構造分析

た。第11因子は、その場所が、気軽に入って過ごせることができる場所であることを示す項目であるため「入りやすい環境」と命名した。第12因子は、無理をせず本来の自分であることを示す項目であるため、「自己本来感」と命名した。α係数を算出し、各因子の信頼性の検証を行ったところ、十分な信頼性が確保された尺度であることが認められた。

b) 共分散構造分析

抽出された因子が、そこを「居場所である」と認知することに対して与える影響を共分散構造分析により明らかにする。図-4に分析結果（パス図）を示す。検討する共分散構造分析モデルでは、「まちなかの居場所感尺度因子」と「居場所の選択（種類）」という2種類の変数群を用いて分析するが、

「居場所の選択（種類）」については、4章（1）b）で使用しているB分類による分類方法（プライベートorパブリックと交流の有無で分類）を用い、どの種類の居場所を選択しているかというダミー変数を使用する。図-4に示したパスは、すべて有意傾向（5%）を示したパスであり、実線が正、点線が負の影響を与えている。なおモデルには、居場所感尺度の各因子間の共分散が存在するが、図が複雑になることを考慮して省略している。「パブリック交流なし」では、自由感やアクセスの良さが正の影響を与えていることから、自由に過ごせることが規定因になっている居場所であるといえる。1人で図書館や喫茶店へ行くことなどがその例である。「パブリック交流あり」では、被受容感や多様性が正の影響を与えているため、多様な人との交流から、人間関係やその場所に親しむような居場所であるといえる。居酒屋や、趣味・サークルの集まりなどがその例である。「プライベート交流なし」では、交流がないにもかかわらず自己有用感が正の影響を与えているため、個人的な仕事などに落ち着いて取り組めるような居場所と解釈した。「プライベート交流あり」では、被受容感や自己本来感が正の影響を与えているため、他者から認められ、「心の居場所」として安心できることが規定因になっていると考えられる。友人宅や実家がその例である。このようにまちなかの居場所は、居場所の種類によって居場所だと認知する規定因に違いが見られた。

各適合度指標の数値は、GFI=0.63, AGFI=0.59, RMSEA=0.07, RMSEA上限=0.08, RMSEA下限=0.07であった。GFIが低い、これは因子を構成する各質問項目同士の共分散を仮定していないことに起因している可能性がある。RMSEAについては悪くないあて

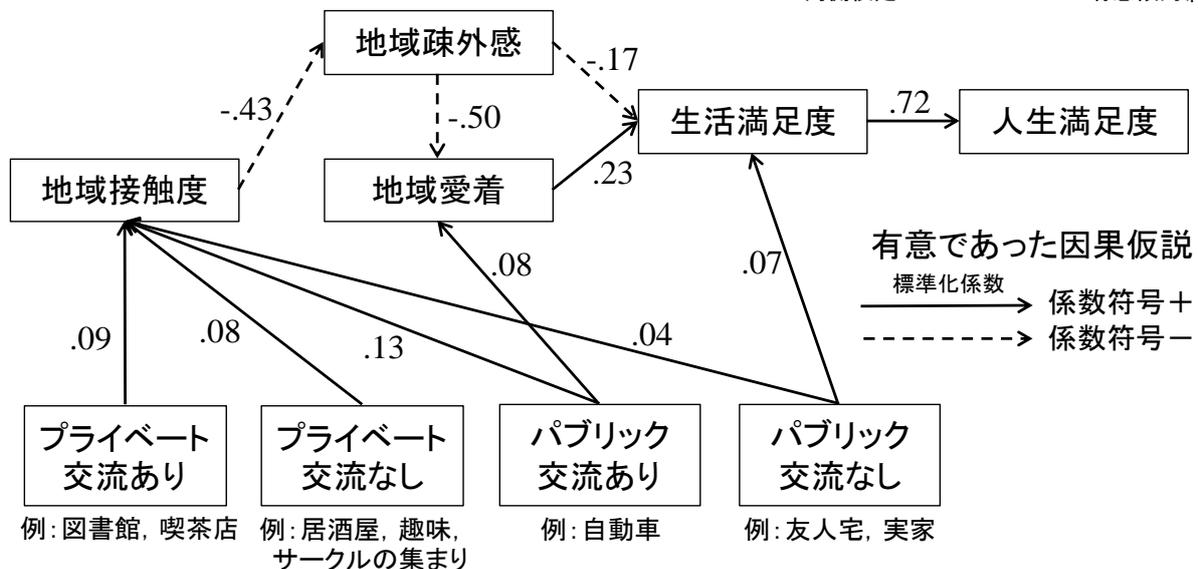


図-5 まちなかの居場所の存在が地域との関係性や生活の質に与える影響についての共分散構造分析

はまりであるといえる。

(3) 居場所の存在が生活の質や地域との関係性に与える影響

a) 平均値の比較

まちなかの居場所が「ある群」と「なし群」で、生活の質や地域との関係性を測る各指標の平均値を比較した。結果を表-11に示す。すべての指標で有意な差が見られ（1%有意水準）、まちなかの居場所がある人のほうが「ない」人に比べて生活の質が高く、地域との関係性が良い傾向にあることが分かる。

b) 共分散構造分析

居場所の種類が、生活の質や地域との関係性に与える影響を共分散構造分析により明らかにする。図-5に分析結果（パス図）を示す。検討する共分散構造分析モデルでは、「生活の質や地域との関係性を測る指標」、「居場所の選択（種類）」という2種類の

表-11 居場所の有無による生活の質や地域との関係性を測る指標の比較

		サンプル数	平均値	t値
生活満足度	有り群	730	4.53	5.02 **
	無し群	748	4.14	
人生満足度	有り群	730	3.76	5.54 **
	無し群	748	3.39	
地域愛着	有り群	730	3.61	2.72 **
	無し群	748	3.50	
地域接触度	有り群	730	2.61	6.86 **
	無し群	748	2.22	
地域疎外感	有り群	730	3.16	-4.52 **
	無し群	748	3.29	

両側検定

**：有意傾向(p<0.01)

変数群を用いて分析するが、「居場所の種類」については、4章(2)b)で行った共分散構造分析と同様、B分類による分類方法を用い、どの種類の居場所を選択しているかというダミー変数を使用する。図-5に示したパスはすべて有意傾向(5%)を示したパスであり、実線が正、点線が負の影響を与えている。

まず生活の質と地域との関係性を測る指標同士の因果関係を見ていく。地域接触度が地域疎外感に負の影響を与え、地域疎外感は地域愛着へ負の影響を与える。これは、地域接触度が高ければ地域疎外感が減退し、やがて地域愛着が高まるという事を示している。生活満足度は地域疎外感から負の、地域愛着から正の影響を受けており、生活満足度は人生満足度へ正の影響を与えている。これは、地域との良好な関係性が生活満足度を高め、やがて人生満足度の向上につながることを示している。

次に、それぞれの居場所のダミー変数が各指標に与える影響を見ていく。地域接触度へはすべての種類の居場所から正の影響を受けている。比較的、「パブリック交流あり」からの影響が大きい。「パブリック交流なし」からは生活満足度へ、「パブリック交流あり」からは地域愛着へ正の影響を与えている。その人にとって「まちなかの居場所」があるということが、生活の質や地域との関係性の向上につながることを示している。

各適合度指標の数値は、GFI=0.98, AGFI=0.96, RMSEA=0.06, RMSEA上限=0.07, RMSEA下限=0.05であった。十分な当てはまりであるといえる。

5.おわりに

本研究では、人々が「まちなかの居場所」と認知している場所とその規定因を明らかにすることを試みた。その結果、「まちなかの居場所」を持つことは、人々の生活の質や地域との関係性の向上に寄与していることが示された。更に、プライベートな居場所に比べ、パブリックな居場所はより直接的に生活の質や地域との関係性にプラスの影響を与えている可能性も示された。以上のことから、人々にとっての「まちなかの居場所」を意識したまちづくりの重要性が示唆されたと言える。

本研究では、「まちなかの居場所」について主に場所の特性に着目した分析を行ったが、今後は人と場所、居場所感との関係性について明らかにするため、個人属性の差異に着目した分析が必要である。

参考文献

- 1) 国土交通省：中心市街地活性化のまちづくりホームページ <http://www.mlit.go.jp/crd/index/pamphlet/01/index.html>
- 2) Ray Oldenburg：The Great Good Place, 1989.
- 3) 日本建築学会：まちの居場所 まちの居場所をみつける／つくる，東洋書店，2010.
- 4) 石本雄真：居場所概念の普及およびその研究と課題，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第3巻第1号，2009.
- 5) 田中麻貴，田嶋誠一：中学生における居場所に関する研究，九州大学心理学研究 第5巻，pp.219-228，2004.
- 6) 則定百合子：青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究，神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文-学術，甲4275，2007.
- 7) 杉本希映，庄司一子：「居場所」の心理的機能とその発達的变化，教育心理学研究，54，pp.289-299，2006.
- 8) 石本雄真，齋藤誠一：中学生の生活が居場所感に与える影響について，神戸大学発達科学部研究紀要，14(2)，1-6，2007.
- 9) 石本雄真：居場所感に関連する大学生の生活の側面，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，2(1)，1-6，2008.
- 10) 中村総市郎：大学生における「居場所」と精神的健康に関する研究，創価大学大学院紀要 30，pp.309-358，2008.
- 11) 林田大作：都市生活においてオフィスワーカーが構築する「場所」に関する環境行動論的研究，大阪大学博士論文，2004.
- 12) 宮下敏恵，石川もよ子：小学校・中学校における心の居場所に関する研究，上越教育大学研究紀要第24巻第2号，2005.
- 13) 石塚昌保：「協働型居場所づくり尺度」の開発，多文化協働実践研究(13)，pp.31-52，2011.
- 14) 角野善司：人生に対する満足尺度日本版作成の試み，日本教育心理学会総会発表論文集(36)，pp.192，1994.
- 15) ED DIENER, ROBERT A. EMMONS, RANDY J. LAR. SEM, and SHARON GRIFFIN：The Satisfaction With Life Scale, Journal of Personality Assessment, 1985, 49, 1, 1985.
- 16) 大谷華，芳賀繁：地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響，立教大学心理学研究，Vol.45，pp.01-09，2003.
- 17) 萩原剛，藤井聡：交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析，土木計画学研究・講演集，vol.32，2005.
- 18) 羽鳥剛史，中野剛志，藤井聡：ナショナリズムと市民社会の調和的關係についての実証的研究，人間環境学研究 8(2)，pp. 163-168，2010.
- 19) 中島喜代子，廣出由，小長井明美：「居場所」概念の検討，三重大学教育学部研究紀要，自然科学・人文科学・社会科学・教育科学，2007，58，pp.77-97，2007.
- 20) 藤竹暁：居場所を考える 藤竹暁編「現代人の居場所」（「現代のエスプリ」：生活文化シリーズ3），pp.47～57，至文堂，2000.
- 21) 住田正樹：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在，pp.3～14，九州大学出版会，2003.